あすとろ通信☆彡



VOL.36
2017.9

岡 山 ア ス ト ロ ク ラ ブ 会 報

☆ c o n t e n t s ☆

＊アメリカ日食観測記　hawk
＊連載小説　訪問者 -VISITOR- 第２話　オーモリ
＊アストロ随想　もぐ
＊星々の名前　Sirius
＊天文川柳　てつにい
＊昔日の一葉　T#
＊天文クロスワードクイズ　Sirius

よみもの

アメリカ皆既日食観測記

【はじめに】

皆さんこんにちは。2017 年 8 月 21 日にアメリカ皆既日食を見てきました。観測旅行に行ったのは、OAC 会員のうち、Gumbo さん、近藤 2 号さん、カワニシさん、ゆうまりさん、つるつるうどんさん、私（Hawk）をはじめとする、それぞれの家族で総勢 11 名、大団体での日食観測ツアーでした。今回はそのツアーの一部始終をお届けします。

【出発まで】

まずこの日食観測は、１年間から計画されておりました。今回は、雑誌社等が主催するツアーでなく、自分達で計画して各種予約をする旅行です。飛行機や宿の予約をネットで行うのですが、予約開始になるのが１年前。今回の観測は、場所がアメリカというアクセスしやすい場所であることから、世界中から天文愛好者が押し寄せる可能性があります。皆で相談して、行き先候補を決め、夏季の天気や皆既時間等も考慮して、最終的に観測地は、ワイオミング州キャスパーという田舎町に決まりました。皆既時間は 2 分 25 秒と、かなり食の深い場所での観測です。もう 2 分以上も皆既が見れるかと思うと皆ワクワク。その他に観測地だけでなく、観測後にどこに行くか等の観光プランも決めていきます。



その後、いよいよ１年前の飛行機とホテルの予約。これがもう大変でした。Gumbo さんがひとりで頑張ってネット予約をしてくれたのですが、まず飛行機はディスカウントチケットの出てきた KOREAN　Air を速攻で予約。なんとかアメリカのシアトルまで渡れる算段がつきました。次にアメリカ国内の移動と、各地のホテルを予約。予想どおり、世界中から日食観測を目指して天文ファンがつめかけてるようで、ホテルがネットでも瞬殺状態。なんとか Gumbo さんが頑張ってくれて、お値段も手ごろなホテルと、アメリカ国内での移動（飛行機とレンタカー）を予約してくれました。

いや～～、飛行機／ホテル／レンタカーと 11 名分も予約するのは大変だったろうと思います。Gumbo さん、本当にありがとうございました。

予約が終わると、皆、「これでなんとかアメリカに渡って日食観測できる～～」と安堵感が湧いてきます。１年後か～～と思いながら、まったり～～と仕事をしながら時間は流れ、12 月の年末には、日食旅行の説明会兼食事会を皆で開催。皆で楽しく食事をしながら、皆さん、どこを観光するか、またどんな機材を持っていくか等、楽しい会話がはずみます。


日食説明会の様子

その後、時も過ぎ、ぼちぼち６月～７月。そろそろ皆さん、機材の準備と、スーツケースに機材をどう詰め込むかを考え始めます。わかってるんだから、皆早くやれば良いのに

～～と、全員同じことを思いながら、実際に機材を詰め始めたら、「スーツケースの重量制限 23kg（無料預け荷物の制限）にひっかかる。どうやって軽量化しようか」等々の話題が飛び交います。私も同じく機材を持っていくのですが、私の機材は眼視用の双眼望遠鏡。大きすぎて、また重量も重くスーツケースに入りません。しかしなんとかして持っていきたいと思い、双眼望遠鏡の軽量化改造を行い、ようやくスーツケースの中に入ることができるようになりました。

そんな感じで、皆、なんとかスーツケースおよび機材持込手荷物に機材を満載。奥さんにも持ってもらったりしながら、多分、ひとりあたり 40 ～ 50kg の荷物を持ち運んだんじゃないでしょうか。今考えればよくやるな～～と思いますが、行く時は勢いがありますから、まあ皆こんなものです。





この他に、パスポートの準備や国際運転免許の準備もすませ、いよいよアメリカ旅行へ旅たちます。お盆開けの８日間の旅行なので、皆仕事を１週間休む準備をして･･･滞りなくして･･･たぶん皆さん問題なくやっているのでしょう。某国から旅行前にミサイルが飛んでこないことも祈りつつ、８／19（土）に日本をいよいよ旅立ちます。

【出発～キャスパー到着まで】

岡山空港から飛行機で出発し、まずは韓国ソウル仁川空港で乗り継ぎです。仁川空港では関空から乗ったカワニシさんと合流。乗り継ぎに約６時間あるので、韓国市内の無料観光ツアーに出かけたりもしながら、夕方にはいよいよシアトルに向けて出発し、約９時間のフライトでシアトル入りです。

シアトルには現地時間で翌日 12 時頃到着しました。その後、入国審査に並ぶのですが、ここでは多くの日本人の人をみかけます。話してみると、皆、日食観測に来たそうで、大阪や佐賀あたりからいろんな人が来ております。楽しく話しをしながら、しかし今回は日食観測の人が多いのか、入国審査に 2 時間かかり、その間皆と話ながら、入国審査を終えました。

そして、ホテルにチェックインし、初日はシアトルで宿泊です。市内観光に出た後、夕食は、シアトルでは有名なウォーターフロントのお店で「豪快手づかみシーフード」。文字で書くとなんのこっちゃ？と思いますが、実物を見ると納得。写真のような、エビ／カニ／貝等の茹でたシーフードが、テーブルの上に、豪快に広げて乗せられます。それを手で掴み、カニなんかは木のハンマーで叩き割りながら、シーフードを食べていきます。もうガンガン食べないととても減らないくらいの量があり、現地のビールも飲みつつ、あまりの量に、最後は「エビ／カニなど高価なものを優先して食え！」とばかり食べまくって、シーフード三昧を楽しみました。とてもインパクトのある美味しいシーフードでした。



そして、シアトル宿泊後、翌日は早朝の飛行機で、コロラド州デンバー空港を経由し、ワイオミング州キャスパーに入ります。キャスパーには昼過ぎに到着し、さっそくホテル周りを口ケハンします。口ケハンの結果、駐車場付近で

観測できそうな場所を見つけました。しかし、現地の天気は現在曇り。。　はて、明日はどうするかとホテルの部屋で作戦会議に入ります。

こういう天気の悪い状態も考慮してレンタカーを借りているので、いざとなればレンタカーでどこかに移動して観測ということもできます。現在の天気は曇りだが、天気予報のサイトをいくつか見ながら、予報サイトの信頼度（GPV みたいな感じで、曇り度合いが表示されるサイトがあるのです）も考えながら、日食観測は、ホテルの駐車場で見るのが良いだろうと最終判断します。添付写真は、よしここで見るぞ〜〜と皆で決めた時の写真。ここで見ると決めたら、夕食もかねて、翌日の朝食・昼食を近くのスーパーに買出しに。アメリカのスーパーはすごいですね〜〜。どの食べ物も Costco みたいな大量サイズで売ってます。500ml 24 本入りのミネラルウォーターが＄2.50 なんてのもあります。1 本 10 円そこらです。皆、パンやフルーツなど好きなものを買出し、明日はついに日食観測だ〜〜と眠りにつきます。

【日食当日】





いよいよ８月２１日（月）の日食観測当日になってきました。起きてみると皆もう機材のセッティング始めてるし。私もいそいそと機材のセッティングを始めます。私の機材は皆さんのとは異なり、眼視用の機材なのでセッティングが早いです。眼視用にソーラーフィルターをつけて、太陽観測を始めます。他の皆さんもセッティングは順調のようで、観測・撮影の準備は万全です。天気のほうも幸いに、昨日の曇りが嘘のように、予報どおりの晴れ間が広がってます。雲もほとんどないし、昨日の皆の判断は大当たりでした。





日食の始まりは現地時間で午前 10 時 22 分。観測用 PC で時間をカウントして、いよいよ日食の始まりです。まずは手始めの第一接触。第一接触開始から 10 秒もすると、眼視でも徐々に太陽が右側から欠けてくるのがわかります。皆、「おお〜〜、欠けた欠けた〜〜」と大興奮。しばらく観測をしてると、何か空にちょっと薄雲がかかってきました。う〜〜ん、どうなるんだろうと思いつつも、ここまで来たらもう後には引けません。雲が晴れることを祈りつつ、観測を続けます。

観測してると、一緒のホテルに宿泊している外国人の方が、「望遠鏡見たい〜〜！」というオーラを発しながら我々の傍に来ました。見たいと言われたらここは天文普及を目的としてい

るOAC会員として見せなければなりません。海外で外国人を相手に、プチ観望会の始まりです。我々の泊まったホテルでは、望遠鏡を持ち込んでいる人はあまりおらず、皆、日食グラスかカメラを使って観測をしています。皆さんがそういう状況だから、望遠鏡を持ち込んだ我々は相当珍しかったのでしょう。ソーラーフィルターをつけた状態で部分日食中の太陽を覗いてもらうと、皆「すごい〜〜！」を連発。「あの黒い点(Black spot)は何？　爆発？(Explosion?)」と聞かれるので「爆発じゃないよ。太陽表面の温度の冷たいところ(Cool spot)」と説明します。また、みんな手持ちのスマホやカメラで、アイピースの像を写そうとします。このあたりは、日本もアメリカもみんなかわらないですね。皆さんにひとしきり見せて楽しんでいたところで、食もすでに半分以上が経過。ぼちぼち第2接触が始まります。

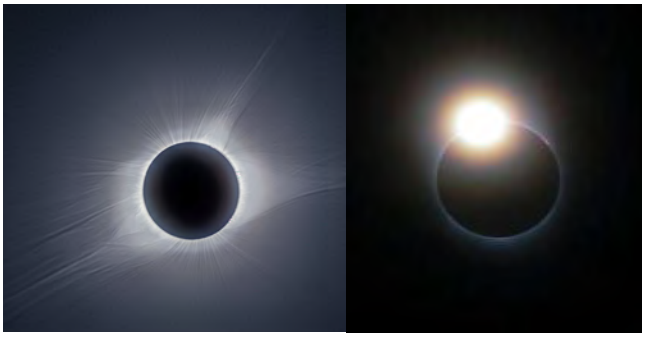


第2接触は11時42分。いよいよ皆既日食の始まりです。皆既数十秒前には、皆、望遠鏡のソーラーフィルターを外します。もちろん私もソーラーフィルターを外します。観測用PCのカウントダウンに耳を傾けなら、皆既がいよいよスタート。皆、太陽に向かって眼を向けると、太陽の周りに輪のようなリングが！！　皆のOH！！という歓声とともに皆既日食の始まりです。

皆既日食が始まれば、皆さん観測に撮影に大忙し。何せ今回の皆既の持続時間はたった2分25秒。一時でも見逃すまいと皆必死です。こちらも、ここぞとばかりに今日のために軽量化して持ち込んだ眼視用機材で皆既を観測します。一目見た皆既中の像は、「コロナの流線がはっきり見える！ものすごい〜〜」の一言です。こんなにはっきりとコロナの流線が見えるんだ〜〜と感動。またよく見ると、太陽の端のほうには、赤いプロミネンスもはっきり見えます。白いコロナの中に浮かぶ赤いプロミネンス。実に神秘的です。眼視の像なので、画で表現できないのがつらいところですが、ここは変わりに、望遠鏡で撮った皆既中の写真を添付しましょう。これまたコロナがはっきり見えてすごいです。気がつくと、周りはもう夜のように真っ暗になっています。皆も、自分の機材や、また肉眼でも皆既を見ながら楽しみます。

そうこうしてると、急に夜になったのに驚いたのか、鳥が群れをなして飛んでいきました。まあ鳥も驚くわな〜〜と納得の風景です。夕焼けのようなきれいな景色を見ながら、皆既が終わりに近づきます。

そして皆既もいよいよ終わりの第3接触。望遠鏡での眼視観測は眼を傷める危険性があるので、ここは肉眼で観測です。第3接触が始まると、いままで輪のようになっていた太陽の右側



の1点が明るくなり、徐々に明るい部分が輪のように広がっていきます。「ダイヤモンドリングだ〜〜！」と皆、大興奮。第3接触の始まった点を中心に、リングのように光の輪が広がる風景は、まさしくダイヤモンドリングです。なるほど、実に実態をよく表した語だと納得です。そして、それから数十秒で太陽もかなり明るくなり、もう肉眼での観測はできなくなります。

「ああ終わってしまった〜〜、2分って短い〜〜、でもすごかった〜〜」と皆口々に話しながら、第3接触も終わり、部分日食に戻ってきました。その後は、皆で日食の感想を語りながら、第4接触まで観測を続けます。第4接触は13時09分。ソーラーフィルターを通して、部分日食を観測しながら、いよいよ日食も終了

です。

こんな感じで、今回の旅行の最大の目的である皆既日食は無事観測できました。第１接触後に気になっていた雲のほうは、幸いにも皆既中は、雲の切れ間に太陽が入ってくれたようで、観測に支障もなく非常にラッキーでした。今思い出しても、実に印象的な時間で、まさに「２分間のスペクタクル」という表現ができるような、神秘的な観測でした。現地の人相手にプチ観望会も開けたし、実に充実した日食観測でした。

【日食その後】

そして日食が終わると、その日はゆっくりと休んで・・・ではなく、元気な我々は 15 時頃ホテルを出発し、レンタカーを駆って次なる目的地「デビルズタワー」に向かいます。「デビルズタワー」は「未知との遭遇」でも出てきた有名な場所で、キャスパーから車で２時間程。ここに行って、夕日に染まるデビルズタワーを見る＆撮るのです。ハイウェイを飛ばし、一路デビルズタワーへ！！

そして、ハイウェイを気持ちよく走ってるとここでアクシデントが発生します。３台連なって走っていたら、先頭車の Gumbo さんが車を路肩に寄せました。なんだろう？周りの写真でも撮るのかな？と思って、最後尾の私も車を路肩に寄せました。ふとバックミラーをみると、バックミラーには、何か赤と青のライトが光る車が写ってます。。。 「え？パトカー？？？　嘘？　マジ？」。しばらく事態が飲み込めません。。　日本なら「何かありました？」と聞きながら車を降りるところですが、ここは海外、ハテ？どうしたものか。。と考えてるうちに、警官がドアの傍にやってきました。開口一番、「免許持ってる？（Do you have drivers license?）」と言われ、「持ってる持ってる！」と主張しながら、国際免許を差し出します。「国際免許？　オリジナルのライセンスは？」と言われるので、日本の免許証も提示。。。フーム。。という顔をしながら警官が語ります。「XXXX の箇所を止まらずに通ったろう！　また制限速度 XX マイルのところを XX マイルで走ってたろう！」と言われ、これは素直にうなずいたほうが良いものだろうかと思いつつ、「うん、うん (Ja, Ja)」と適当に相槌を打ちます。。（XX の箇所はご想像ください。）

こりゃ、罰金は覚悟しないといかんな〜〜、クレジットカードで罰金払えるのかな〜〜などと思いつつ、しばらく話を聞いてると、警官は Gumbo さんの先頭車両／近藤２号さんの２台目車両に向かって歩いていきます。そして Gumbo さんと少し話しをして戻ってくると、再び私の車に来て、睨みつつ「いいか ,XXXX してないんだぞ！　制限速度 XX マイルのところを XX マイルで走ってたんだぞ！」的なことを言いながら「気をつけて運転しろ！(Carefully drive!)」と言っております。「こりゃ許してくれるんだ、ラッキー！」と思いつつ、「Yes ！ Yes！ Carefully!」と回答すると、警官は去っていきました。そんな感じで、無事事なきを得て、再びレンタカーの旅が始まりました。後で聞くと、この状況をバックミラーで見ていたカワニシさんによれば、警官は私の車に近づく時に、銃のホルスターのバックルを外して、いつでも抜ける状態にしていたそうな。。。

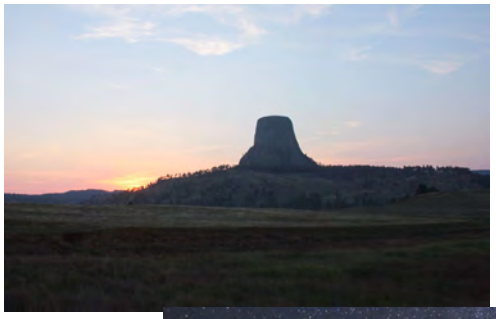
カワニシさんが激写した、銃をいつでも抜ける状態にした警官が近づいてくる様子を以下の写真でどうぞ。

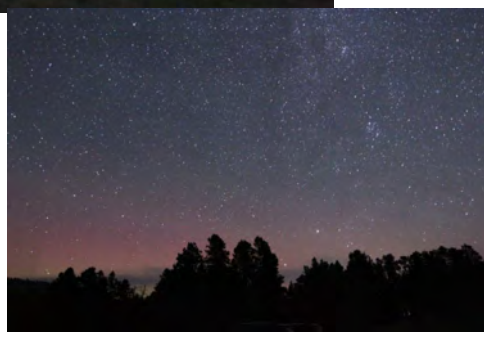
その後、警官に注意された「XX 停止、制限



速度 XX マイル」に気をつけながら、目的のデビルズタワーにやってきました。デビルズタワー、近くで見ると大きいですね〜〜。本当に UFO が着陸しそうな感じ。皆で夕日に染まるデビルズタワーを写真に写して楽しみます。その後、一旦ホテルに戻るのですが、星見屋の我々はふたたびデビルズタワー付近に出かけます。デビルズタワー近くで天体観測だ〜〜と。海外に来て、夜も天体観測できるなんてなんて幸せ。

案の定、現地に着くと、日本では見たことのないような濃い天の川が広がってます。アメリカは、こういう光害の少ない自然環境が広がってるのがとても良いですね。しばらく観測してると、翌朝も早いので、ぼちぼちホテルに戻る時間が。ここはホテルに戻る組と、ひきつづき観測する組（まだまだ星見不足な組）の２組に別れます。そして引き続き観測組が１時間ほど観測をしていたその時、カワニシさんが叫びます。「オーロラが写った！」と。「嘘、どこ？」という感じで、そちらにカメラを向けて、ゆうまりさん達が確認のために写します。確かに、地表近くに赤く移る部分が。北側（カナダ方面）に発生した低緯度オーロラです。太陽の黒点の活動が活発になってるらしく、低緯度オーロラが発生しているのです。「すごい、すごい～～、こりゃもう撮るしかないね！」とばかり、皆一斉にシャッターを切ります。もうこの時点で、皆、明日の早朝出発のことなんか一切考えていません。ひとしきりオーロラを撮り終えたら既に、午前１時。さすがにぼちぼち帰ろうか～～とホテルに戻ります。１日のうちの皆既日食とオーロラを同時に見ることができたすばらしい日でした。





【日食旅行後半】

その後は、日食も無事観測でき、オーロラ観測もできたという満足感を胸に、各地を観光します。いろんなところに行きました。行ったところを列挙すると主に以下の３つです。

・マウントラッシュモア
・デンバー観光
・シアトル観光

マウントラッシュモアは、簡単に言えば、アメリカの４大大統領を彫った岩。この彫刻、1941 年に完成したらしいですが、コンピューターもないこの時代によく彫ったな～～と感心します。なんでも製作に 14 年かかったらしいです。



そしてさらに一同は、デンバー観光へ。デンバーでは市内だけでなく、郊外のロッキー山脈にも行きました。ロッキー山脈は、デンバー市内からハイウェイを通って１時間くらいで行けます。山脈の中までハイウェイを通してるなんて、なんてスケールの大きいアメリカ。しかもハイウェイは無料です。なんて車社会なアメリカ。そしてハイウェイを降りると、目的地「ジョージタウンループ鉄道」につきます。



この鉄道は、この地域でゴールドラッシュがあった頃に設置された鉄道で、今でも観光用に汽車が走ってます。この汽車がまた面白い。日本ならＳＬに乗るような感覚ですが、ロッキー山脈の見事な風景をバックに、ゆっくりと汽車が走ります。隣町まで行って往復する小一時間の旅でしたが、見事な風景をバックに、オープン席で汽車を楽しみながらの観光でした。ジョージタウン



ループ鉄道を見た後は、デンバー市内観光も楽しみました。

そして日食旅行最後の寄港地は、最初に寄ったシアトルです。シアトルは近郊にボーイング社の工場もあり、まずは工場見学を楽しみました。737 ジャンボジェットや、最近の 777 や、最新鋭の 787、これらの飛行機が組み立てられてるとても大きな工場内で、製造工程を見せてくれます。工場内は撮影禁止のため、工場隣の展示館内の写真をどうぞ。



ボーイング工場を見た後は、シアトル市内観光です。シアトルは、スターバックスの発祥地としても有名で、スタバ１号店に寄ったり、その他に「パイクプレイスマーケット」といういろんなものを売ってる市場に寄ったり、どれも見ごたえがありました。





そんなこんなで、楽しいシアトル観光が終わったら、長い日食旅行もいよいよ終わりです。実に名残惜しい思いを抱えつつ、帰りは重い機材と多量のお土産を抱えて、皆で無事に日本に帰りました。こんな楽しい旅行ができたのも、１年間から予約に奔走し、現地ではいろんな人と交渉してくれた名ツアーガイドの Gumbo さんと、一緒に行って頂いた皆さんのおかげです。Gumbo さん、皆さん、本当にありがとうございました。この場を借りてお礼申し上げます。

【さいごに】

では最後に、海外に天文旅行等に出かけられる方に少しアドバイスを。今回感じたことを 2 点書いておきます。

ひとつめは、機材の事前テスト・準備は、旅行前に入念に。遠征時の基本ですが、持っていく機材を事前に組み立てて動作確認をして、満足いく動作が確認できるまで、事前の確認は必要です。これを怠ると、現地で機材がうまく動かないとか、操作を失敗する等のトラブルが起きやすくなります。かくいう私も、軽量化改造した望遠鏡は、十分なテストができなかったせいもあり、架台にトラブルが発生し、現地で応急修理をする羽目になりました。また撮影用機材も持ち込んだのですが、十分動作確認をしなかったため、操作に失敗し、皆既中の写真は１枚も撮影できませんでした。まあ眼視で見れたので初期の目的は達しましたが、こうした事前の確認を十分しておけば、現地でのトラブルのリスクはかなり減らせます。

ふたつめは、飛行機の搭乗は、国内線といえども２時間くらいは余裕を持ってチェックインしましょう。現地では不慣れですし、また我々は望遠鏡も持っているので、怪しげな機材は必ずといって良いほどセキュリティチェックでひっかかります。私も望遠鏡の対物レンズを何度カバンを開けて説明したことか。。　近藤２号さんなんかも、バランスウェイトとか、チェックで引っかかっておりました。アメリカ国内では、テロ対策のためにセキュリティチェックが非常に厳しくなっており、こうしたチェックにかかる時間を考慮しても、空港には早めにチェックインするのが良いです。

こんな感じで、いろいろと気をつけたほうが良い点もありますが、仲間と一緒に行く海外旅行は良いですね。海外のいろんなものを見て回れるし、海外での星空観測もできます。何より仲間と一緒だと非常に楽しいです。皆さんもこれを読まれて良いなあと思われたら、日食観測・海外星見旅行にぜひどうぞ。ひと頃日常を忘れて、楽しい旅ができること請け合いです。

執筆：hawk



　この作山古墳は民家と隣接している状態なので、麓は「待ち合わせ」には不向きな場所だ。この古墳のどこでと決めていなかった事今更ながら気付いてしまった。舌打ちするもどうしようもない。

（しまったな。けどなぁ、あの状況じゃ冷静な判断なんか無理ってもんだろ。とにかく登ってみるしかなさそうだな）

　意を決して坂に足をかけた。本来は褒められた事ではないのだろうが、場合が場合だ。勘弁してもらうしかない。前方後円墳は長さはあるが、高さはそうでもない。程無く後円部の頂上に辿り着いた。

（どこにいるんだ？）

　周りを見渡そうとした途端

「早かったわね」

　沙綾の声が上から聞こえた。

「……！！」

　驚きで声も出せず反射的に後ずさる。上を見ると、古墳の上に数多く生えている松の木の枝に腰かけている沙綾が、夜目にも白い笑顔を浮かべて健吾を眺めていた。そしてその出で立ちは、昨夜遭遇した時と同じ純白のものだった。

「……心臓に悪い真似は止めてもらえないか？」
「ごめんなさい、驚かすつもりはなかったの」

　しっとりとした声でそう告げると、松の枝からふわりと舞い降りて来る。まるで純白の羽根が風に乗って舞うかのような軽やかさだった。

「身軽なんて次元じゃないな。どうやったんだ？」
「それも含めて説明するつもりよ。まずは私が何者なのか？　目的は何か？　ある程度想像はしていると思うけど……そこからね」

（いきなり来たな……。無駄な前置きは無しってわけか、望むところだ。簡単に俺をどうこう出来ると思うなよ）

　いざとなったら健吾は――全力で逃げるつもりだった。陸上部である自分の唯一最大の武器である脚に賭ける以外にないのだ。それでも逃げ切れるとは思っていなかったが、やれるだけの事はやる。せめてもの意地だ。
　そんな健吾の決意を知ってか知らずか、沙綾は腕を組み、右足を軽く広いて語り始めた。

「私の本当の名前はヌアサ。この惑星の人間ではありません」
「……そうか」
「驚かないわね？」
「予想の範囲内だよ。色々と聞きたい事があるけど、まずは君の言う通りに目的を聞こうか」
「賢明な判断ね。話がゴチャゴチャしなくて助かるわ。……私の目的、それはね……移住可能な惑星を探す事よ」

　これも予想してはいた。侵略や観察に加えてありそうな話だ。しかし、移住も方法次第では侵略に変わるのではないか？　これが健吾の頭に浮かんだ疑問だった。

「ちょっと待ってくれ。簡単に言ってくれるけど、そう簡単に行く話でもないだろう？　もし――いや、まず間違いなく揉めるはずだ。何人来るつもりなのか分からないが、その時……君達はどうするんだ？」
「それもきちんと話すわ。落ち着いて聞いてね」

　ヌアサは組んだ腕をほどいて南へ――健吾の方へと歩き出した。

　ヌアサは健吾の横を通り過ぎていく。踏みしめられた下草が、木々の間から漏れて来る月光に照らされ、僅かにだが白っぽく色づいていた。彼女が履いている白いブーツに染められたようにも見える。何か幻想的な、異世界にでも迷い込んだような気分になってしまうのだった。
　程無くヌアサが足を止め、健吾を招く。後円部頂上の南端だった。白く細い指が南西の空に輝く星を指した。。

「あの星を知ってるかしら？」

　指し示した星は西の空に沈みかけているオリオン座の左上部。イラストならばオリオンの右肩にあたる、オレンジ色に輝く輝星――ベテルギウスだった。

「ああ、知ってるよ。星座に興味の無い俺でも、オリオン座ぐらいはわかるからな」
「そう。じゃ、あの星――貴方達の言うベテルギウスが、もうじき超新星爆発を起こす事は？」
「確か……一時期話題になってたと思うけど」

　観測により、ベテルギウスが超新星爆発を起こすであろう事は、ほぼ間違いないとされている。これが起これば、昼間でも見えるであろうと言われる程の明るさになると予想されているが、いつ起こるかまでは分からない。明日かも知れないし、数百年後かも知れない。もしかすると、もう既に爆発していて、その光がまだ地球に届いていないだけなのかも知れない。なにしろ地球から 640 光年も離れているのだから。

「その爆発に私達の星――ネツァク星系第二惑星マルクトが巻き込まれてしまうの」
「……聞いた事が無いぞ、そんな星は？」
「当然よ、私達の星での呼び名なんだから。この星での呼び名が全宇宙共通なワケが無いでしょう？」

　言われてみれば確かにその通りだ。健吾は自分の考察がまだまだ未熟な事を痛感した。

「……そうか、分かった。で、それで移住したいと？」
「そういう事」

　ヌアサの視線が少しだけ下がった。それが何を意味するのか、健吾にはまだ分からなかった。

「正確には爆発そのものよりも、ガンマ線バーストなんだけどね」
「なんだよそれは？」

　超新星爆発の際に発生する莫大な電離放射線が、自転軸に沿う方向にビーム状に放射される現象だ。説明されても文系の典型に近い健吾にはイメージすら湧かない。

「……それはヤバいのか？」
「とっても。運の悪い事にマルクトはその直撃を受けるの。かなり近い距離でね」
「異星人の科学力で防げないのか？」
「……異星人だからって、何でもアリじゃないのよ」

　質の問題では無く量の問題なのだ。その言葉を聞いた健吾は守谷の言葉を思い出した――

「そうだ、基本的な事を聞きたい。ベテルギウスの爆発に巻き込まれるって事は、そのベテルギウスに近いって事だよな？　じゃぁ君の星――ま……まる？」
「マルクト」
「ああそれだ。そのマルクトも当然、地球から何百光年も離れてるんだろ？　どうやって来たんだ？　エネルギーや食糧の問題だってある。確かにあの UFO は大きいけど、光の速度でさえ何百年もかかる距離だぞ？　どうやってクリアしたんだ？」

　健吾は守谷に話を聞いて以来、ずっと考えていた疑問をぶつけた。鼻息荒くドヤ顔になっている健吾を、慈母のような笑顔で見つめ返しながら北東の空を指さして答えた。

「あそこ、見える？　あの青い看板の真上、大体６０度くらい上になるかしら？　君が昨夜見た、私の個人用母船『アムルタート』が浮かんでいるの」
「……あれか」

　ヌアサが指し示す辺りに、確かに見えた。ややハッキリとした雲のような物が、風に流される事無く浮かんでいる。その形は――昨夜目撃した UFO に間違い無かった。ただ一つだけ違うのは、今夜はかなり小さく見えていると言う事だ。恐らくは、かなりの高度に滞空しているのだろう。

「個人用の母船ってのも凄い話だな」
「色々と調査しないといけないしね、装備がかさむのよ。滞在中の食料や何かあった時の為の設備も多種多様だし。データの保存や研究設備も……」
「大変なんだって事は分かった。で、質問の答えは？」

　健吾が急かすように言った。話を逸らしていると思ったのだ。

「つまり、アムルタート単体では恒星間航行は不可能なのよ。研究・分析用装備が多過ぎて、ジェネレーターを小型化せざるを得ないの」
「そうかいそうかい、じゃぁお前さんはどうやってマルクトとやらから来たってんだ？」

勝ち誇った顔で健吾が問い詰める。（さぁ、これからどう料理してやろうか）と頭の中で算段を始めていたが、すぐにそれは崩れさった。

「アムルタートをまとめて運ぶ中枢母船『ハルワタート』で来たのよ」
「へ……？」

思わずマヌケ顔で気の抜けた反応が飛び出してしまった。

（あの巨大な UFO をまとめて？　じゃぁあのクラスの巨大 UFO が何機も来ているのか、この地球に？　いや、それ以前に中枢母船とやらはどれだけデカイんだ？）

健吾の頭の中で疑問一気に疑問が噴き出す。

「いくらなんでも私一人で地球の全てを調査出来るワケがないでしょう？　さっきも言ったけど量的問題なのよ。無数の昆虫や細菌やウィルス、海底生物や寄生虫、季節毎に変化する生物も唸るほどいる。一人じゃとてもとても……」
「ああ……まぁ……そうか……」
「つまりチームで調査をするの。私はその中の一人というわけ」

マルクトからの観測で生物の生息出来そうな惑星をピックアップした後、それぞれの惑星を調査するチームが編成された。ヌアサ達のチームは、まずハルワタートでやって来たが地球には既に文明がある事を知った。先住者達を刺激せずに調査する事を決定した彼らは、調査員各員をアムルタートで地球へ向かわせ、ハルワタートは月の裏側にあるクレーターの中に隠した。調査員達は手分けをして、まず環境・生態系を調査した。自分達が住めない星に移住しても仕方ないのだから当然だ。
温度や湿度、放射線や病原体など多岐にわたる調査を、地球が太陽の周りを５公転する間――つまり５年間かけて徹底的に行った。結果は「居住可能」。そのままでは対応出来ない病原体も、ワクチンを作る事でクリアした結果だ。

「食料は？　地球の牛や豚とか魚なんかを食べられるのか？」
「食べても害は無いけど、栄養にはならないわね。だからアムルタート内部で合成した食料を摂取してるの」
「さすがにそれは気の毒だな」
「ありがとう。だけど調査や恒星間航行の間はそれが普通なの」

さらに調査は続く。環境・生態系の調査が終わると、地球において最も力を持つ種――人類に関する調査が始まった。人類社会の構成単位、文明のレベルや文化及び言語、イデオロギーや対立構造、歴史的背景や宗教に至るまで調査は及んだ。

「……で、結果は？」
「現在も調査中。私達は『善き隣人』として移住する事を望んでいるの。移住を認めてもらえれば、私達が持つ技術の供与も予定されているわ。悪い話では無い筈よ」
「例えばどんな？」
「こんなのはどう？」

ヌアサが右手首のブレスレットに軽く触れると、ブレスレット表面に虹色の筋が幾条も走った。同時に健吾は自分の周りが「見えないなにか」に囲まれた様に感じた。すると――健吾はある感覚に襲われた。ジェットコースターで最初に降りる時の。飛行機が着陸する為に降下する時の。内臓が持ち上がる、あのむず痒いような感覚に。

「うわわ！！
「大丈夫よ、私も一緒だから」

ヌアサがいつもの落ち着き払った声で告げるが、健吾の耳にはまるで入らない。あれよあれよと言う間に身体は浮き上がり、古墳の上に茂る松の木を超え、地上を遥か下に眺める高度に達していた。
ヌアサは膝を抱えた姿勢で、尚もジタバタともがいている健吾を眺めていたが

「最初はこんなものよね。そろそろ落ち着きましょうか」

左手を伸ばして健吾の額を人差し指でチョンとつついて姿勢を安定させてやった。

「どう？」
「あ、ああ……」

ヌアサから目を逸らす。異星人とはいえ、美少女がミニスカートで膝を抱えていたら――健康な男子は目のやり場に困るのである。
多少ぎこちない姿勢で眼下を眺めると自分の遥か下を幾つもの光が走り抜けるのが見える。あれは県道を走る車達だろう。僅かに色付いた光が漏れているのは信号機か。少し目線を上げると、信じられない程に視界が広がった。山を越え丘を越え、これまでは決して見る事の出来なかった風景が眼下に広がっていた。

　幾つもの民家の窓に灯る明かり。悪趣味だと思っていた大きな看板を照らす光。その中を流れていく車のヘッドライト。これまでは変化の乏しい田舎町としか思っていなかったこの町が、妙に暖かく感じられた。
　いつかはこの町を抜け出してやろうとさえ考えていたのに。この町を取り囲む山々が自分を閉じ込めているように感じていたのに。何故だろう、突然にこの町を愛しいものと感じ始めたのだった。

「凄いな……」
「分かってもらえたみたいね。じゃ、そろそろ降りましょう」
「いや、ちょっと待ってくれ！　もう少しだけ……頼むよ」
「分かったわ」

　ヌアサは分かっていなかった。健吾が「凄い」と言ったのは技術そのものでは無かったのだ。凄かったのは自分が見た風景であり、ヌアサが披露した技術は二の次だったのだ。

　数分後、二人は地上に降り立っていた。

「どうだったかしら。地球には無い技術だったでしょう？　説明の為に披露する事を許されている技術はこのぐらいだけど、交流によるメリットが大きい事は分かってもらえたと思うわ」
「……ああ、確かに。けど分からないのは、何故俺にって事だ。国連や各国の首脳に見せるべきなんじゃないのか？」
「その段階になればそうするわ。けどね、問題は一般市民の反応なのよ」

　政治家達はメリットとデメリットを天秤にかけて判断するから話が早い。だが一般市民はどうだろう。感情的、或いは宗教的な価値観で判断するのではないか。そう問われた健吾は――沈黙するしかなかった。

「だから私達は直接調べる事にしたのよ。様々な国や民族、様々な年齢層、社会的立場の人達に接して、まずは一人だけに打ち明けた場合を。その人がどう反応するのか？　その人が属するコミュニティへの影響は？　その他にもあるけれど、それらを調査する為に出来るだけ近い立場に入り込むの。地球人の姿を借りて……ね」
「じゃぁ本当の見た目は違うのか」
「当然よ、全く違う星に生まれて、全く別の進化をして来たのよ？　同じ姿なわけが無いじゃない」
「そりゃまぁ……そうだけど」

　年頃の少年としては、やはり美少女異星人であって欲しい。それが偽らざる本音であったが仕方ない。受け入れるしかなかった。

「で、俺を選んだ理由は？」
「今回の目的としていた年齢層と社会的立場に属する調査対象の中で、最初に出会ったのが君だったの」
「ああ……そう……」

　落胆するのも無理は無い。何か理由があって「選ばれた者」では無く、「最初に遭ったから」というだけだったのだから。決してゼロではなかった少年らしいヒロイズムが、粉々に打ち砕かれてしまった瞬間だった。

「どうしたの？」

　落ち込んだ様子の健吾を怪訝な表情で覗き込むヌアサ。

「……イマイチ人の気持ちが分からないみたいだな」
「ごめんなさい、私達の星では理論が全てなの。感情と言う物が殆どなくて。初めて地球人と接触した時は、『君はまるでロボットだな』と言われたわ。これでもかなり感情を学んで『人間らしくなった』と言われるようになったのよ。もっと学ぶから、今日の所は許してもらえないかしら」
「……そうなのか、分かったよ。今後に期待させてもらう」
「ありがとう」

　気が付けば予想以上の時間が経過していた。そろそろ帰らなければ、家人への言い訳も苦しくなる。健吾はそう告げて帰宅する事にした。

「まだ聞きたい事があった様な気がするけど、それはその都度聞かせてもらう。それでいいか？　ヌアサ……あれ？　湯浅とヌアサ？」
「気が付いた？　私の本名とこの国の名字で一番似てると思った名前にしたのよ。沙綾は湯浅をひっくり返して同様に」
「もしかして……ジョークでやったのか？」
「ジョークはまだよく分からないけど、結果的にそうなのかもね」

　健吾の顔が思わずほころんだ。考えてみればヌアサと出会って以来、初めての笑顔だった。

（こいつ……どうやら悪意だけはなさそうだ。その点だけなら信用していいかも知れない。まだこの先は分からないけど）

そう考えながら古墳を下り始めた。

「じゃ、俺は帰るよ。ヌアサはどうするんだ？」
「無論帰るわよ、アムルタートへ」
「さっきの浮かぶヤツで？」
「この奥に小型船『アールマティ』を置いてるの。それで帰るつもり。気になるなら少し離れて見るといいわ。それと……」
「なんだ？」
「今日はありがとう。周りに聞かれたくない話があるなら、ここへ来るといいわ。君がここへ現れたら、私もすぐに来るから。出来れば夜の方がいいけどね、人目の問題もあるし」
「分かった。じゃぁな」

軽く手を上げて坂を下りる。少し離れて上を見ていると程無く、鈍い銀色をした円筒の両端を絞ったような形をした物体が空へと舞い上がった。翼の無い飛行機が、音も無く飛び立つかのようだった。

その飛行物体――アールマティがアムルタートへと向かうのを見届けて、健吾も走り出す。

思ったよりも時間が経過しているので急がなければならない。いつもよりもペースを上げて走る。（なんだかエライ事になって来たな、とんでもない体験もしたし。俺が古代人だったら、彼女を女神と思ったかも知れないな……いや、明日の朝になったら今夜の事も夢だったと思うかも知れない）そんな事を考えながら、健吾は夜の道を駆けて行った。

――その頃。

アムルタートに着いたヌアサは、格納庫から居住区へと移動していた。ひたすら広く、何も無い空間。床から壁、そして天井に至るまで純白に染め上げられていた。どんな照明システムなのか、彼女の影も出来ていない。白皙の肌と白い服のせいか、まるで黒い髪と黒瞳、そして薄ピンクの唇が浮かんでいるようにさえ見える。

やがて方向感覚や位置感覚を失いそうな部屋の中で足を止め、自分の右側の空間を軽く撫でると――薄いブルーのリクライニングチェアーが現れた。透明感があり、まるで光の椅子だ。それに横たわって深呼吸をしたヌアサは頭の中で今日の出来事をまとめ――目の前の空間を撫でた。

すると今度は様々に彩られた幾何学模様が幾つも現れた。全て立体だ。そのうちの一つに触れると手前にモニターのような物が現れ、ヌアサは母国語で報告を始めた。

『こちら科学技術院ビナー所属　第 27 移住惑星調査団員ヌアサ。識別番号 9907418-4650。ハルワタート応答願います」
『こちらハルワタート。同隊長ゴーバン。識別番号 9901617-1794。報告を開始せよ」
『第３８次民間潜入調査において、レベル１フェイズ３終了。引き続きレベル２フェイズ１に移行します」
『了解した。引き続き調査対象の自由と安全を最大限保障するように』
『了解。報告を終わります』

再び目の前を撫でるとリクライニングチェアー以外の全てが消え、ヌアサの周りは何も無くなり、静寂が満ちた。

一つ伸びをしたヌアサは軽く目を閉じ――静かな呼吸を始めた。それが寝息なのかリラックスしているだけなのか。それを判別する者も気にする者も彼女の周りには居なかった。

翌日。健吾はくるみと共にアーケード街を自転車で走っていた。カップルが並んで通学する姿は、年配者の目を細めさせる微笑ましさを持っているものだ。健吾たちもアーケード街の住人たちと笑顔で朝の挨拶を交わして、学校へと向かう。

「……で、なんかトチ狂った連中に後をつけ回されたってワケよ」
「それは災難だったわねぇ。ま、浮気するほどモテるわけじゃないから、心配はしてなかったけど」
「……信用していたって事にしちゃもらえんか？」
「じゃぁそういう事にしといてあげる。これはサービスね」

健吾はあくまでも「表向きの事情」を話して、納得してもらう事に成功したのだった。つまり、沙綾と転入前夜に偶然出会い、たまたま同じクラスになり、その縁で校内を案内していたら「彼女がいない連合」につけ回された――という内容だ。偶然という要素が強すぎるが、表面上は間違い無いのだから証人は幾らでもいる。それに、あれだけの美人なのだ。初日からファンクラブめいたものが出来ても「確かにあり得る」と納得するだろう。

ただ――その姿がかりそめのものである事を知っているのは健吾だけだった。

(そういや、あの姿が『借り物』だとしたら……本当はどんな姿なんだろう？　知りたいような知りたくないような……)

やはり年頃の少年としては、目の覚めるような美少女でいて欲しいと願ってしまう。とは言うものの、すぐ隣には健康美に溢れた彼女がいるし、何だかんだといってもいつかは居なくなる異星人とどうこうなろうというつもりも無い。その辺りは古風なところがある少年だった。

学校へと到着し、自転車置き場から靴箱へ向かう為に正門方向へ連れだって移動する二人の耳に、妙なざわめきが聞こえてきた。登校時は賑やかなのが普通だが、どうもいつもとは違う怒号が聞こえる。何か騒動でも起こっているのかと二人が正門に行くと、あり得ない光景が展開されていたのだった。

正門の入り口で沙綾が佇んでいる。それはいい。だがよく見ると何人もの男子生徒達が周囲を取り囲んでいる。沙綾をどうこうしようというのではない。番犬よろしく周囲を威嚇しているのだ。そして先導とと言うか露払いと言うべきか、先頭に立って「どけどけどけぇぇぇぇい！　道を開けろぉぉぉぉぉ！」と怒鳴っているのは、健吾の旧友である竹本だった。

健吾とくるみは二人並んでお口ポカーン状態である。

「何なのアレ……？」
「俺に聞くな……」

やっと喋れた内容がこれである。番犬達に守られて沙綾が校門を通過する頃、教師が数人やってきて一団を制止してなにやら問答を始めた。どうやら竹本が代表して受け答えしているようだ。健吾は知らんふりを決め込もうとしたが、くるみが「友達を見捨てるの？」と言いたげに引き止めるので、仕方なく沙綾と竹本達の方へ向かう。

健吾に気づいた沙綾は「あ、美作君おはよう」とにこやかに手を振り、教師の一人は「おう美作、お前も竹本に何か言ってやれ」とけしかけ、竹本は武本で「美作か、早いな」と堂々たる態度だ。健吾はこのカオスな状態に軽い頭痛を感じながら事態の収拾を図る事にした。

「おい竹本、お前何やってんだ！？」
「何って。押し問答中だ」
「そういう意味じゃない！　この集団は何なんだ！」

横から沙綾が答える。

「皆が日本の女子はこうやって登校するんだって教えてくれたんだけど。何かまずいの？」
「そんなワケがあるかぁぁぁぁ！」

全く疑っていない風な沙綾の答えに、健吾と教師たちが同時に吼える。

「周りを見てみろ！　他の女子の誰がそんな登校をしてるってんだ！」

健吾に言われてキョロキョロと周りを見渡し、

「そう言えばそうね……」
「言われる前に気づけ！　んで早く離れろ！」

とぼけた答えを返す沙綾に、手振りも交えて急かす健吾。だが竹本がその胸倉を掴んで締め上げる。

「美作！　貴っ様ぁぁぁぁぁ！！　湯浅さんに対してその態度はなんだぁぁぁぁ！！」
「なんだはお前だ！　放さんか！」

ごつい手首を掴んで引き離そうとする健吾。教師達も「落ち着かんか、お前ら！」と間に入って両者を分ける。ようやく本題に入れる空気になったところで、教師達の出番だ。

「とにかくだ。もうこんなアホな登校方法はするんじゃない！　いいな？」

至極当然な指導も、目にピンクの膜がかかった状態の竹本には、暴論としか聞こえなかったらしい。

「ちょっと待った！　校則のどこに『集団通学を禁ず』だなんて項目がある！？」
「どこの世界にわざわざそんな禁止事項を謳った校則があるか！！　常識的に周りの迷惑になる行為は禁止されるだろうが！！」

「じゃぁ周りが迷惑してるって言うんですか！」
「目一杯迷惑しとるだろう！　見えてないのか！」

　周りを見渡して、言葉を失う竹本。そこへ沙綾がさらっと
「やっぱり皆に迷惑をかけるのは良くないわね。もうこんな事は止めましょう？」

　と無情とも思える発言をした。「こんな事」扱いされた事も分らないのか、一団は声を揃えて「ハイ！！」と見事な返事をする。教師たちも（こいつ等どうにもならんな……）と内心で頭を抱えつつ、常識の勝利を確信した。

「もういいから早く行け。朝から世話を焼かすな」

　健吾達は靴箱に向かう。沙綾が一緒に来ているので、当然のように竹本達も付いてくる。それはいいが、何故かこの一団は妙に足音が揃っているのが気にかかる。ザッザッザッと、見事な行進だ。

（こいつ等軍隊かよ……）

　内心ではウンザリしながら竹本に問いかける。

「お前らなんでいきなりこんな事をおっ始めたんだ？」
「決まってるだろう。湯浅さんがあまりにも美しいからだ！」

　恥ずかしげもなく言い放つ竹本に冷ややかな視線を浴びせつつ、健吾が氷のように冷たい言葉を放つ。

「なら好きにすりゃいいがな、何年か経ったらお前ら……夜中に突然今日の事を思い出して、蒲団をかぶって一人でジタバタする羽目になるんだぞ？　それでもいいのか？」

　身も蓋もないとはこの事である。だが、脳をピンクのヴェールで覆った竹本には通じなかった。拳を握り締めて力説する。

「いいや俺達はそうはならん！　なったとしても悔いは無い！　今この瞬間を俺達は全力で生きたのだ！！　完全燃焼して真っ白に燃え尽きた！！」
「燃え尽きてどうすんだよ……人生終わったって事だぞ」

　そんな突っ込みも空回りのようで、快気炎を上げる竹本は後ろに付いて来る面々を示し、朗々と述べる。

「見ろ！　彼らの晴々とした表情を！　お前に朝からこんな顔ができるか！？　いいや出来まい！　出来はすまい！　我々と貴様とでは、人生の充実度が桁違いなのだ！！」

　確かに彼らの顔を見ると、いわゆる「やり遂げた男の顔」になっていた。満ち足りた笑顔。「我が生涯に一片の悔い無し！」とでも叫びそうなほどの清々しい面持ち。確かに健吾には出来そうも無い。ただ沙綾を囲んで周囲を威嚇しただけで、こんな表情は出来ない。

「わかったよ、好きにしろ。にしても……やけにごつい面子が集まったもんだな」

　ざっと見ただけでも、空手部副主将の重近（しげちか）、ラグビー部キャプテンの東條（とうじょう）、ボクシング部副キャプテンの渡邉（わたなべ）、柔道部主将の近藤（こんどう）等々、校内でもトラブルは絶対に避けたいタイプが並んでいた。

「うむ、いいところに気がついたな。つまり……湯浅さんの魅力は男度数の高い、つまり『漢（おとこ）』ですら容赦なく惹き付けてしまうという事だ！」
「ああそうかい、それは良かったな。とにかく俺はお前達と関わるつもりはないからな」

（きっとこいつは、こうやってアジ演説でリーダー的ポジションに収まったんだろうな）

　きっぱりと彼らと距離を置く事を宣言した――つもりだった。

「奇遇だな、俺達もお前が何処で何をしようが知った事では無い。が、しかし！　湯浅さんある所、必ず俺達も共にある！　つまり湯浅さんが貴様と関わるなら、俺達『湯浅沙綾さんを崇める会』も貴様と関わらざるを得ん！」
「ちょっと待て！　なんでそうなるんだ！　変な会まで作りやがって……今言っただろう、俺は……」
「貴様の都合など知った事ではない！　俺達の都合でもない！　全ては湯浅さんの都合次第なのだ！」

（ちょっと待てよ……ヌアサは俺を『観察』してるわけだろ。絶対に俺に関わるに決まってる。そしたら、こいつ等も自動でついて来るのか？　ウ

ソだろ……）

　絶望的な気分になった健吾はヌアサとくるみの方へと視線を向ける。二人は呆気に取られた風に、健吾と竹本のやり取りを見ていたが、とうとうくるみが爆発した。

「ちょっと竹本君！　あんたいい加減にしなさいよ！　幾らなんでも一方的過ぎるじゃないの！　湯浅さんを崇めようが拝もうが、そりゃ好きにすればいいわよ！　でもね、なんだって湯浅さんが関わる人達にまで迷惑をかけるのよ。健吾君だけの話じゃないわけでしょ！？」
「むう……黒瀬さん、恐らく巻き添えを食うであろう君には申し訳ないとは思う。が、しかしだな……」
「しかしもペプシもないわよ！　大体あんた自分の言ってる事が分かってんの？　完全にストーカー宣言じゃないのよ！」
「ス……ストーカーだと？」

　ようやく我に帰ったらしく、『崇める会』の面々はすがるような目で沙綾を見る。それを受けた沙綾は、しなやかな指を形の良い顎に当てて少し考えるそぶりを見せた後、こう告げた。

「……そうね、ストーカはさすがに困るわね」

　絶望の呻き声を上げて項垂れる『崇める会』の面々。女神から直接断罪されたも同然なのだ、無理からぬ事だった。だが、ここでフォローを入れるのが沙綾である。

「でもね、気持ちは嬉しいの。それは確かよ。だから常識の範囲内で、周りの人達に迷惑をかけないように気をつけてもらえれば……きっと誰も怒らないと思うの。そうしてもらえたら、私もうれしいな」

　と、聖母のような笑顔で語りかけたのだ。優しく、そっと、裏表を微塵も感じさせない雰囲気をまとって。これで『崇める会』の面々が喜ばないはずがなかった。

「うおぉぉぉぉぉぉん！！」

　といわゆる「男泣き」が爆発したのである。感極まったのであろう、感謝だか感激だかの言葉を述べているようだが、もはや何を言っているのか分らない。言葉になっていないのだ。抱き合って泣いている者、天を仰いで泣いている者、這いつくばって泣いている者……かなり異様な状態である。遠巻きに眺めている生徒達も、足早に立ち去って行く。

「……俺達も行こうか」
「……うん」
「……そうね」

　もう付き合いきれないと判断したのか、関係者と思われたくなかったのか、健吾が促すと沙綾もくるみも『崇める会』を放っておいて靴箱を経由し、それぞれ教室へと入る。

「上手いもんだな？」
「あのぐらい出来なきゃ、とてもじゃないけどやってられない仕事なのよ」

　沙綾の苦労が偲ばれる。それぞれ席に着くと、もうチャイムまでそれほど時間がないようだ。朝一番の騒動で、かなり時間を取られたらしい。カバンの中身を机に放り込んでいると中村がやってきた。

「朝から大変だったな」
「見てたのかよ」
「あれだけ騒いでりゃぁ当然だろ。あれこれと巻き込まれる奴だな」
「……好きで巻き込まれてるんじゃないぞ？」
「そりゃそうだろうよ……と、来たか」

　坂本の到着を察知して中村が席に戻る。また騒々しい一日が始まろうとしていた。

　ヌアサがやって来てからの数日間は、健吾にとって受難の日々と言えた。基本的にヌアサは健吾と同行する事が多いので、結果として「彼女がいない連合」と「湯浅沙綾を崇める会」の両方に付きまとわれ、神経をすり減らす一方だったのだ。健吾はヌアサと恋人同士というわけでもないので、「彼女に近づくな」とも言えない。ヌアサの方も彼らに冷たくするというわけにもいかない。転校してきたばかりという設定だし、調査員がトラブルを起こすなどもっての外だ。一度彼らを追

い払ったブレスレットの効果――　一時的な精神支配――も、短期間に繰り返し使うと対象の脳に秋影響があるため、そう何度も使う事は出来ないのだった。
　また「連合」と「崇める会」の対立関係も表面化してきた。沙綾とかかわる者に対する嫉妬を原動力とした「連合」と、沙綾を崇める事でお近づきになる事に成功した「崇める会」。不仲になるのは時間の問題だったのだ。
　中には両方に所属する者もいたが、それが発覚するやいなや「連合」と「崇める会」の双方立ち会いの元で、どちらか一つに帰属するよう迫られた。対立という関係にある以上当然と言える事ではあるが、何とも息が詰まる状況だ。だがそれも両団体に限られた話で、一般生徒達には別世界の事だ。
　そして健吾も一般生徒である。沙綾と関わりがある――とは言っても一方的に観察されているだけだが――とは言え、「連合」にも「崇める会」にも所属していない。両団体も健吾と沙綾がかなり淡白な関係であると認識したのか、健吾に対しては沙綾と同行している時以外は徐々にノーマークになっていった。週末になる頃には放課後の部活は安心して活動できるようになっていた。
　そして土日にかけて開催された県主催の陸上競技記録会で、健吾は表彰台こそ逃したものの、まずまずの記録を残した。これによって翌月のインターハイ予選に出場する事が決まったのだった。

「次は三年生にとって最後の大会になる。みんな悔いを残すなよ！　今回出ない者も、やり残しの無いように、しっかりバックアップしてやれ。練習に付き合うなり何なり、自分にできる事があるはずだ。自分の分まで走ってもらうつもりでやれ！」

　顧問の寺坂が檄を飛ばし、部員も目の色を変える。キャプテンの木口が皆に怪我をしないよう、体調管理をしっかりするよう訓示して会場を後にした。一旦学校まで全員で帰り、三々五々帰って行く。
　健吾も仲の良い連中といつものように帰って行った。帰宅後、落ち着いてからくるみに電話で結果を伝える。

「やったじゃん！　インターハイ予選は無理そうだって言ってたのに、出れるんだ！」
「結果は期待できないけどな」
「そんな事言ってたら、実力も出せないで終っちゃうよ。勝つつもりでいかないと悔いが残るかも知れないよ」
「……確かにそうだな。分かった、勝つつもりで――全力で行くよ。結果は、終わるまで気にしない事にする」
「そうそう。まずは実力を出し切る事だけを考えよう」

　くるみと話しているとポジティブになれる自分がいる。その事実が健吾に力をくれる。そんな彼女に、自分は何を返してあげられるんだろう？　ふと自問してしまうのだった。考え込んでいても埒が明かないと判断し、夜の自主トレに備えて体を休める事にした。この辺りの切り替えは早い若者である。
　レンタルしていたＤＶＤを再生すると、前回見た続きが再生された。ＳＦものというかロボットもののアニメ映画である。ライバルキャラが地球に小惑星を落とそうとするのを主人公が食い止めようとしている。クライマックスの場面だ。

『おんどれ程の男がなんちゅう器の小さい！　この赤ずくめの変体仮面！』
『ララーを殺したおのれが言えた事か！　このクソ天パ！』

　地球も自分達も危ないという局面でこんな罵り合いをする作品を面白いと思う。そんな自分達が異星人達と共に生きていけるのか。不安が頭をよぎった。
　夕食を終え、いつもの時間に出発する。しばらく走ると――あの古墳が見えてきた。ヌアサと対話をした、あの古墳だ。彼女がやって来てから約二週間が経つ。その間に何度もこの古墳に登り、思いつく限りの疑問をぶつけてきた。

「地球へ移住するといっても、具体的にどうするつもりなんだ、君たちは？」
「……理想的には、こうして地球人の姿を借りて――」
　ヌアサはくるりと一回転してみせる。それだけでも舞を思わせる、優雅な動きだった。
「この星の文化や風習、伝統や歴史を学びながら共に暮らせたらとは思っているの。それが無理なら……」
「無理なら？」
「どこか無人の砂漠か荒地でもいい、自治区のような地域をもらってひっそりと暮らすか。或いは海底にでもドーム型都市を作ってそこで暮らすか。そんな感じね」
　健吾には「そこまでして移住したいのか」と疑問に思えるが、ヌアサは「滅びるよりはいい」という。確かに絶滅したくないのは、どの星の生物でも同じなのだろう。僅かな可能性でも……とい

うのも、もっともな話だ。

「カナダから来たって設定はどういう根拠で決めたんだ？」
「どうもこうも、日本に来る前はカナダで同様に調査をしていたからよ」
「あ……そう」
　確かに日本が最初の調査地とはいっていなかった。こういう場合は自分が最初の調査対象と思いがちではあるが、迂闊である事は否めなかった。

「最初の説明だと何年もかけて環境調査をやってたんだよな。君は一体何歳なんだ？　確かに大人っぽいけど」
「あら。この星では女性に年齢を聞くのは失礼な事なんじゃなかったかしら？」
「あ……すまない、つい」
「いいわ、確かに気になるでしょうしね。私達の平均寿命は……貴方達の平均寿命に三をかけて、ゼロを一つ足したぐらいよ。で、私はその四分の一ぐらいになったところ」
「……日本人の平均寿命で計算していいのか？」
　頷くヌアサ。
「ちょ……ざっと……600……！？」
　　それが本当なら、さすがに地球人側からの羨望や妬みを受ける破目になるのではないか？　隣人としてくらしても、八尾比丘尼のようになってしまうのではないか？　様々な考えが健吾の脳裏に浮かぶのだった。

　そんなやりとりをして来たが、今日は地球側――と言うか自分の、それも普通の高校生としての事を話してみよう。そんな気になっていた。やはりインターハイ予選に出場できると決まって、正直嬉しいのだ。こんな話をした時に沙綾＝ヌアサはどんな顔をするのだろう？　どんな反応をするのだろう？　健吾は妙に気になっていた。
　人目につかないように古墳を登って中央辺りに向かうと、一分もしないうちに個人用小型艇アールマティが降りてきた。降り立ったヌアサはいつもとは違い、ブーツとタイツとミニスカートを黒で統一し、その上に淡い緑のケープを纏っていた。やや意表を突かれた健吾だが、きちんと褒める事は忘れない。いや、実際に似合っているのだ。ブーツやミニスカートだけでも十分に美しいのだが、ケープを纏った事で更に品のあるセクシーさになっている。ケープは似合わないとモモンガのように見えるものだが、絶妙の着丈を選んでいるためかスタイルの良さなのか、凛々しい女性騎士の肖像のようだった。
　いつもと違うヌアサの佇まいに戸惑いながら、健吾は今日の大会の結果を告げた。

「……というわけで、インターハイ予選に出場する事が決まったんだ」
「おめでとう。予選を突破出来たら、また言わせてもらうわね」
「出来たらね。正直、自信は無いんだ」
「なら、何故出るの？　インターハイ出場は名誉な事なのよね。なら出られなければ意味が無いんじゃないの？」

　素朴な疑問なのかも知れない。論理的な結果だけが全てならば。

「名誉……欲しくないと言えば嘘になるな。でも期待はしていないんだ、自分の実力は分かってるから。でも、その実力でどこまで行けるのか。それを試したいんだ」
「面白いわね、貴方達は」
「褒め言葉と思っておくよ。そんな俺達地球人のファッションに関心を持ってる君が言うんだから」

　ヌアサは軽く両腕を広げ自分の服装を眺め、

「こう言う多彩な服装って、この星が初めてなの。なにか、こう……これが『楽しい』という事なのかしら」

　「楽しい」が分からない――これは衝撃的だった。ではこれまで見せてきた笑顔は作り物だったのだろうか？　笑顔は楽しさだけで浮かべるものではないにせよ、自分たちが受け取っていたものとは違っていたのか。それはそれとして、ファッションに関心を寄せるとは、生まれた星が違っても女性というものは共通部分があるものなのか。

「面白いのはヌアサの方だ。その感情を『楽しい』と覚えておくといい。きっと正解だよ」
「ありがとう。――ね、健吾君の次の大会。応援に行ってもいいかしら。そういう競技会って、行った事が無いの。知っておかないとね」

　また波乱を呼びそうな発言だった。

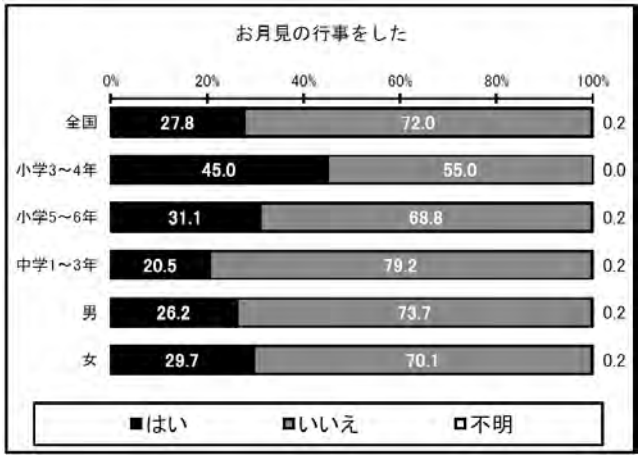
（第 3 話に続く）

mogさんのアストロ随想



今年の中秋の名月は10月４日です。ただし、わらべ歌にあるような真ん丸い月は６日になるようですが、世の中に逆らうことなく４日に「お月見」をしましょうね。

さて、むか～し昔から日本の季節の行事として行われている「お月見」ですが、どのくらいの人が「中秋の月」を愛でているのでしょうか。お馴染みの国立青少年教育振興機構（国立吉備青少年自然の家の本部）が行った調査があります。全国の国立２７施設を利用した小学校３年生～中学校３年生3,208人を対象として、平成26年（2014年）10月に直接質問紙法で調査した結果です。



全国では２７．８％の子ども達が「お月見」をしていて、小学校３～４年生が４５％で、学年が上がるにつれて減少し、男子より女子の方が多く体験していることが分かります。

このことから、小学校１～２年生や就学前の幼児期では、半数以上の子ども達が「お月見」をしているのではないかと予想できそうです。逆に、大人になると「お月見」はやらなくなってしまいそうですが、実際のところはどうなんでしょうか。なにかデータはないかな～っと探してみました。

ありました、ありました。「アットホームボックス」というところが、全国20～59歳の男女1,410名（47都道府県各30名ずつ）を対象として、2015年８月にインターネットリサーチで行った調査結果です。予想通り、大人で「お月見」をしているのは１６．４％という結果でした。さびしい！



日本の伝統文化はどうなってしまうのでしょうか。子ども達には「お月見」のような四季折々の行事や節句を通して、日本の自然に親しんでもらい、心豊かに育って欲しいな！と思いますし、大人になっても自然や伝統文化に目を向けてもらいたいな！っと思うのであります。

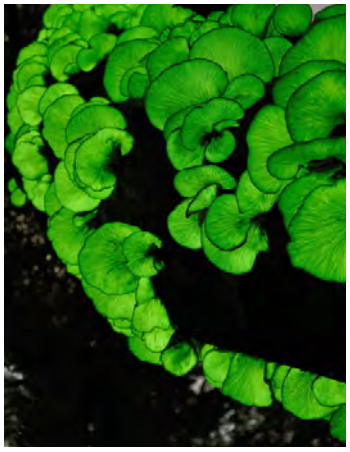
そう思っていたら、岡山はやっぱりいいところですね。後楽園で「お月見会」が毎年開催されていて、多くの老若男女が広～いお庭で「お月見」を楽しんでいるではあ～りませんか。しかも、そのお庭は「日本三大名園」なのですから羨ましい。さらに話題は「名月観賞会当日限定のオリジナルお月見弁当。１，２００円（税込み）」が人気と言うことで、私も食べてみたいですぅ～。ポイントは「うさぎが刻印された満月饅頭」が特ウマだとか。なるほど「桃太郎の国」だけに団子といったら「きび団子」ですが、お月見も「きび団子」というわけにはいかないので「満月饅頭」にしたのでしょうか。やりますね～。

最後にこちらの写真は「月見茸（ツキミタケ）」ではなく「月夜茸（ツキヨタケ）」です。こん

なあやしい光を愛でながらいっぱい呑むのもイイですね。ただし月のない闇夜でないと見られません。しかも食べられません、有毒です。

執筆：もぐ





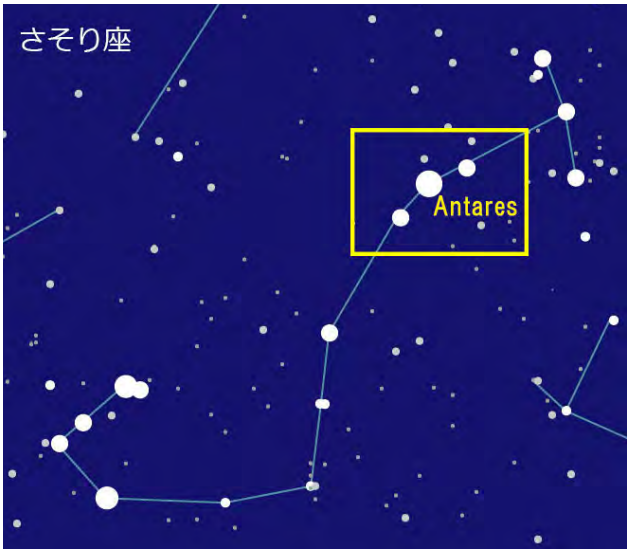
星々のなまえ

初秋の宵には南西の低い空で、誰もが知る夏の星座「さそり座」が大きなＳ字が沈みまけています。
その中で最も明るく輝く赤い星アンタレスとその前後に輝く２つの星をまとめてご紹介します。

秋の空気漂う 10 月初旬、午後 7 時頃では、南西の高度 15 度（手を伸ばした拳一つ半程度）ほどのところにそれらが地平に沿うような形で見えます。晩秋や時刻が遅くなると見つけられなくなりますので早めに見つけてみてください。

今年は、南寄りで少し高度が高いところ、へびつかい座に明るい土星がありますのでお間違いのないように (^^)

★アンタレス（Antares）
赤く輝く一等星、さそり座のα星です。
太陽や惑星の見かけ上の通り道である黄道に近く、時折、妖艶な赤に輝く火星もアンタレスに近づきます。
このアンタレス、語源的にはアンチ･アレース、火星に対比するもの、というところから来ているというのが一般的な由来のようです。
アンタレスは読みは全く違うものの、さそりの心臓という意味を持つ呼び名も使われています。
中国名としては「火（か）」、「大火（たいか）」



などがあります。
さて、アンタレスの両隣にある二つの三等星を合わせた３つの星に面白い見方があります。
中国では、「心宿三星」といい、青龍の心臓にあたる位置から来ています。
日本では、「籠（かご）担ぎ」とか「てんびん」など、地方によって三つの星をまとめて見ていた呼び名が多く残っています。籠担ぎでは、両側の三等星を収穫した農作物を収める籠がぶら下がる柄先と見立てていました。農作物がたくさん獲れて重くなり、担ぎ手の顔に見立てた真ん中に位置するアンタレスがその重みで赤面することで、アンタレスが赤く輝くほどその年は豊作となるなどと占っていたようです。

執筆：Sirius

written by Sirius

特別企画・天文川柳

第３回目となる天文川柳を開催しました。募集期間が短かったにもかかわらず、今回も皆様の思いあふれる力作揃いで１００句を超える応募がありました。
みなさんの投票等をもとに審査も困難を極めましたが、最優秀 de 賞を含む８句が今回選ばれましたので、ご紹介いたします。

最優秀 de 賞

「天文屋
夜遊び好きと
誤解され」
KON

【作者の一言】素晴らしい作品が沢山ある中から、拙作が最優秀賞とはお恥ずかしい限りですが、選んで頂いた皆様どうもありがとうございます。

愉快 de 賞

「なんぼするん?」
「何に使うん?」
「要るものなん?」
NR

【作者の一言】この度「愉快ｄｅ賞」に選んで頂きありがとうございます!!
「なんぼするん?」とは岡山弁で「いくらするの?」という意味。言葉は違えど日本のあちこちの家庭で繰り広げられているであろう、機材購入時の格闘風景を川柳にしてみました。受賞の喜びをまず妻に伝えたいと思い…

特別 de 賞

「見栄っ張り
雲があっても
ぼく見たもん」
もぐ

【作者の一言】「こども天文博士」と漫才をしながら観察会をやってます。しかし今年は天気にやられっぱなしです。
受賞の喜びは「子ども博士」に伝えずにおきます。ありがとうございました。

残念 de 賞

「観測地
ついて気がつく
忘れ物」
T#

【作者の一言】選んでいただきありがとうございます。
でも、自分の作った句の中で最後にパパッと作った分なので入選にびっくりしております。
古くはケーブルレリーズ、フィルムから始まってレンズ、三脚にいたるまで現在まで順調に忘れ続けております。

特別 de 賞

「機材買い
意気込むまでが
ヤマでした」
ミッキー

【作者の一言】拙作の川柳選んで頂きありがとうございます、写真の方も上達せねば（汗）。

風流 de 賞

「月の宮
月下美人に
訪れる」
abe

【作者の一言】風流 de 賞に選んで頂きましてありがとうございます。
大変うれしく思います。
皆さんの作品も拝見させていただきながら、興味深く☆　腑に落ちる☆　流石☆∞　と思いました。
今後ともどうぞよろしくお願いします。

特別 de 賞

「このハゲー
言われて振り向く
へびつかい」
つるつるうどん

【作者の一言】こたびははえある日本レコード大賞最優秀勲一等旭日大瑞宝章みたいなのをいただき、まことに感無量のきわみであります。かえりみますれば幾星霜、雨ニモマケズ風ニモマケズデクノボウトヨバレナガラ日夜頑張ッテ参リマシタ。このやうなご立派な賞、私のごときがいただいてもええのでしょうか、と逡巡しつつも、神武以来先祖代々のおわしします御霊前にこの栄誉を報告いたして参る所存でございます。

特別 de 賞

「星出ろと
願えば妻の
角が出て」
omori

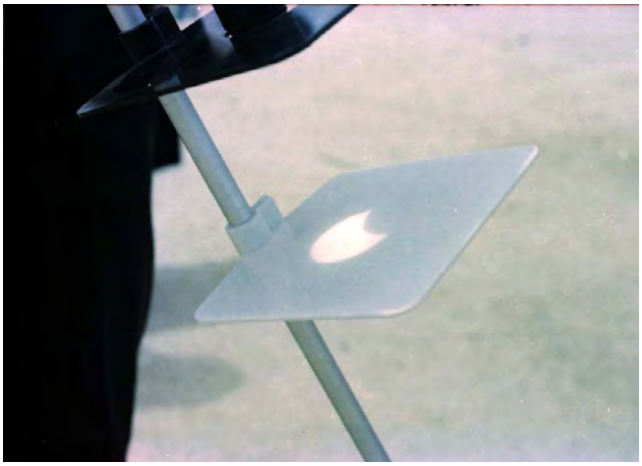
【作者の一言】下手な鉄砲も数打ちゃ当たる」作戦が当たり、栄えある「特別ｄｅ賞」に命中して感謝感激です。
今後も弛む事無く相撲道……ではなく天文底なし沼道に邁進していきたいと思います。ありがとうございました。

昔日の一葉

第３回　日食

今年最大の天文現象、アメリカ皆既日食。今号冒頭の hawk さんの記事にもあるとおり、当クラブの有志遠征隊は無事皆既日食を見ることができました。自分は行けなかったのですが，夜更けのファミリーレストランの一角にてツイキャス中継で感動のお裾分けにチョッピリあずかりました。

ということで、今号の一葉はこの何の変哲も無い日食写真。1981 年夏の部分日食のときの



ペンタックス ME スーパー　SMC ペンタックス M50 ミリ F1.7 を F5.6?　露出 1/500　サクラカラー 400　手持ち

写真です。母校で五藤８センチ屈折で投影したものを撮りました。自分はようやくカメラを手に入れてはじめて日食を撮ろうと思ったものの、機材面で無理だったので投影法での撮影と相成ったものです。このときは食分 50 パーセントくらいでシベリアでは皆既日食になっていたとおもいます。

それから何回か日食は見ましたが、やはり残念だったのは 2009 年の上海皆既日食。仕事をあまり休まなくても行けるとあって勇躍上海に乗り込みましたが結果は豪雨。真昼に 5 分あまり暗くなる現象は味わえたものの、黒い太陽は見えずじまい。頭の先からつま先までずぶ濡れになって帰ってきました。

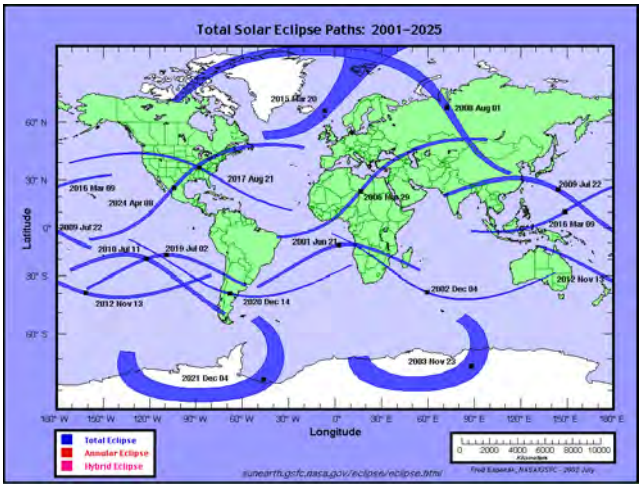


左）上海にて辛うじて見えた欠けた太陽（2009・上海）
右）雲越しに何とか見えた金環日食（2012・淡路島）

2012 年には金環日食が国内で起こり、これは淡路島まで遠征の結果見ることができました。中心食では無かったですが、雲越しに肉眼でリング状になった太陽を見ることができました。

ちなみに、上海・淡路島日食行に同行した OmegaC さんは、2012 年 11 月にオーストラリア北部ポートダグラスにて雪辱を果たしましたが、自分が皆既日食を見る日が来るのはいつの日か…。

ちなみに、今回のアメリカ皆既日食、1 サロス周期経過した 18 年後の 2035 年には日本で北陸関東皆既日食になります。その時自分は約 70 歳。それまで元気でいて多分生涯最初で最後の皆既日食、是非見てみたいものです。



2001 － 2025 年の皆既日食が見えるところ
NASA ホームページより

イベント報告

公開観望会「天の川を探索しよう」
（大芦高原・美作市）
2017 年 7 月 22 日（土）実施予定
は雨天のため中止されました。

天文クロスワードクイズ

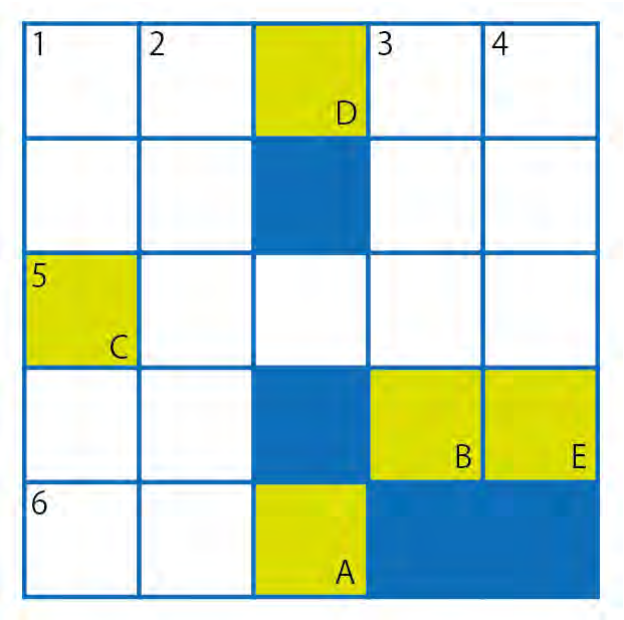
連載二回目となります天文クロスワードパズル。
今回も数字の枠から始まるタテ・ヨコのカギをヒントに､単語をカナで埋めてみてください。
青で塗りつぶしたマス以外がカナで埋まったら、最後にマス内に書かれたアルファベット順にカナを並べることである言葉になります｡それを最終の答案に入れ込んで完成です。
今回は設問数も少なく簡単ですよ！

あなたが OAC 会員なら、OAC メーリングリストにて、最終の答案のみでよいので、声高らかに名乗りとともに投稿してください。正解者には心からの栄誉を捧げます。
前回は、つるつるうどんさんがその栄誉に輝きました！　おめでとうございます。

＜ヨコのカギ＞
1. 流星のこと
5. 天王星を発見したイギリスの天文学者
6. 1869 年アメリカの皆既日食にて太陽コロナの輝線を発見し、太陽の大気であること実証した二人の学者、ハークネスと○○○

＜タテのカギ＞
1. 芭蕉の有名な句「○○○○○月は東に日は西に」
2.「地球は青かった」の名言で知られる人類初の宇宙飛行士
3. 広角の対義で、星を観る用具名にも使われています
4. 星雲や星団の有名な天体カタログを作ったことで知られる○○○○・メシエさん

＜最後の答案＞
曇っていたのに、ABABCDE



執筆：Sirius

イベント案内

公開観望会「冬ごもり前の星空散策」
（六番川水の公園・岡山市）
2017 年 11 月 25 日（土） 20 時から
催行状況は、OAC ホームページにてご確認下さい。

岡山アストロクラブ
会員募集中
星の好きな人ならだれでも OK ！
OACホームページより申し込み下さい。

発行元：岡山アストロクラブ
発行日：平成２９年９月２７日
次号発行予定：平成２９年 12 月
ホームページアドレス
http://oac.d2.r-cms.jp/

編集後記
今年最大の天文イベント、アメリカ皆既月食。現象当日の夜更け、深夜 2 時頃に集まって現地からのツイキャスによる中継をパブリックビューイング。皆既の感動を少し味わえました。
　ひるがえって日本の夜空。5 月頃まではまだ晴れ間がありましたが、梅雨入りからこのかた、さっぱり晴れ間がありません。もう秋風が吹いて来ましたが、せめて秋の空は綺麗に晴れてほしいですね。